

歎已の刻過頃本町通りにて行逢て見侍り、珍らしければ爰に寫せり、略圖是を持行に、夜更て通行する事は、道にて不淨の者に不逢様のためなりとぞ、圖のごとく六ツ目籠を組て、上のかたに柵をたて、跡の方に柳にて、長き細き棒の様なるもの附たり、是柳の箸なりとぞ、

〔尾張名所圖會七海東郡〕藪香物同村(上堂津村)正法寺にて製す

むかし萱津の里に市ありし時、近里の農夫、瓜、茄子、蘿蔔の類の初なりを、熱田宮へ奉らんとせしかども、道遠ければ、阿波手の森の竹林の中に甕を置き、今も猶其舊あらゆる菜蔬を諸人投入れ、鹽をも思ひくゝに撮み入れなどせしが、自ら混和して程よき鹽漬となりしを、二月、十一月、十二月、彼社へ奉獻せし也、是を藪の香の物と名づけ名産とす、後世路傍の行人など、神供の物をも憚らずとり喰ひ、或は穢物をもほどこしければ、終に正法寺の境内にうつして、今に至る迄、熱田宮へ奉納するを例事とす、藪に香の物とはふるき言葉にて、十訓抄略源平盛衰記にも、やぶにかうのものといふ事見えたり、尾陽雜記に云、むかしは、正法寺大地にして、住持は東嶽禪師と通いけるが、必一ツ二ツ此神にさゝり、其比、瓜、茄子、大根、小角豆、蓼やうのものに、商へる人、此森の前を通りてつけ置きより初るとかや、大方日本香の物のは、禪師只拾置べしといへり、扱吉例として、此所の香ふもの、二月、初午の日に、熱田に其品三十二をさゝり、お供とす、又十二月廿四日にも、是を供ふと也、近き頃迄は、阿波手の杜の藪の中に有りけるが、あふれもの、來りてとりくらひ、果には穢らばしきものなど、取込などしける故、制しかれ、今は寺内に來り、藪の中に漬置なり云々、

〔十訓抄三〕二條殿より南京極よりは東は、菅三位時の亭也、三位うせて後年比へて、月のあか

き夜さるべき人々、古き跡をしのびて、かしこにあつまりて、月をもてあそぶ事有けり、をほり方に或人、月はのぼる百尺樓と誦しける、人々聲を加へてたびくゝに成に、あばれたる中門のかくれなる蓬の中に、老たる尼のよにあやしげなるが、露にそぼちつ、終夜聞をりけるが、今夜の御遊いとくゝめでたくて、涙もとまり侍らぬに、此詩こそ及ばぬ耳にも、僻事を詠じおはしますかなとき、侍れといふ、人々咲ひて、興ある尼かな、いづくのわろきかといへば、さうな